

オリオン座は北半球でよく見える星座では最も豪華です。一等星が2つ、二等星が5つで形作られる非常に明瞭な星の並びだからです。この7つの恒星は、東京都内のような「光害」のひどい土地でも、肉眼で観察できるので、すべての小学校理科の教科書で題材として取り上げています。

呼び名も「オリオン（英語での発音はオライオン）」「鼓星（つづみぼし）」「天のリボン」「無限星（ $\infty$ ）」「**区=【休日運休】**（時刻表の記号）」などさまざまです。重要なのは、オリオン座がほぼ「天の赤道（赤緯0度の線上）」に位置し、天球上を移動する間に、その向き（傾き方）の変化がはっきりわかることです。具体的には、東の空から昇ってくる時は「頭を左に寝た状態」、南中時には「頭を上を直立」、西に沈む頃には「頭を右に寝た状態」になります。満月の月面の模様（ウサギの向き）が、東・南中・西へと移動すると傾きが変わると同じ現象です。

教科書では「星座自体は形も大きさも変えずに、向きだけが変化して見える」という意味のことが書いてありますが、その通りです。ただし「大きさ」に関しては、地平線に近いほど大きく見え、南中は小さく見えます。これは単なる目の錯覚で、実際の星座の大きさ……つまり恒星と恒星の離れ方の度合いである「視角度（度）」や、「星座全体の大きさ（平方度）」は、天球上のどの位置にあっても変化しません。

この夜は非常に寒かったのですが、幸い風が全くなかったので、私はオリオン座の恒星と建物の角を比較して、「確かに動いて見える」ということを確かめました。実際に動いているのは地球の地表のほうでしたが……。

(2024年1月上旬／北軽井沢)

